富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 №.4：91－105

〔報　告〕

地球市民的資質を育てる国際理解教育についての考察

―小学校6年生社会科「世界の中の日本」を事例として―

田尻　信壹・荒屋　　誠*

A Study about Education for International Understanding for Enhancing Global Citizenship

―A Case of the 6th Grade Unit of Social Studies "*Japan in the World*" in Elementary School―

Shin-ichi TAJIRI and Makoto ARAYA

摘要

これからのグローバルな時代を生き抜いていく子どもたちにとって，地球市民的資質の育成を目指した国際理解教育は必要不可欠なことであり，小学校段階からその基礎を身に付けることはとても大切である。そのために本研究では，①日本の国際理解教育の潮流を整理，②小学校社会科の歴代学習指導要領を整理，③ジグソー学習を取り入れた国際理解教育の可能性の探究を行った。その後，①～③までの研究成果を基に，小学校6年社会科の単元「世界の中の日本」を開発し，授業実践を試みた。その結果，小学校段階において，地球市民的資質の基礎の育成が可能であることが確認できた。

キーワード：国際理解教育，小学校社会科，地球市民的資質の育成，ジグソー学習

Keywords：Education for International Understanding, Social Studies in Elementary School, Fostering of Ability for Global Citizenship, Jigsaw Method

1　問題の所在

これまで小学校における国際理解教育は，総合的な学習の時間で実施されることが多かった。また，その学習内容については，英語のスキル面を重視した学習や異文化理解の活動などにウエイトが置かれ，真の地球市民的資質の育成を目的としたものになっていない場合が多いことが，2005年に日本国際理解教育学会が行った実態調査[1]でも明らかになっている。この事実は，学校現場の教師に国際理解教育の真の目的や，取り組むべき学習内容がよく理解されていないことや，国際理解教育は総合的な学習の時間に行うものと考えている教師が多いことを浮かび上がらせる。現行学習指導要領の小学校社会科の目標では「社会生活についての理解を図り，我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て，国際社会に生きる民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的な資質の基礎を養う。（下線筆者）」[2]と国際理解教育のねらいにもつながることが明記されている。しかし，小学校社会科の学習の場で，国際理解教育を意識した実践が行われているとは言い難い。

より充実した国際理解教育を行うためには，教科の学習と総合的な学習の時間が両輪となって働く必要がある。そこで，注目するのが教科として社会科の存在である。永井は「国際理解教育は，教育課程の全体にかかわるものであるが，その目標，内容，方法において，非常に社会科的である。」[永井滋郎 1989,p6]と述べている。より充実した国際理解教育を行うためには，まずもって社会科という教科の枠の中で，地球市民的資質の基礎を培うことを意識して学習を進めることが大切ではないかと考えた。

そこで，今日までの間に影響を与えた国際理解教育の様々な潮流について分析し，国際理解教育の内容やねらいがどのように変容してきたかを明らかにする。次に，小学校社会科の歴代学習指導要領を分析し，国際理解教育に関連する内容と取り扱いがどのように変化したかについて明らかにする。さらに，国際理解教育をより充実させるための学習方法として「ジグソー学習」に焦点を当て，学習の成り立ち，学習を成立させるための条件や

* 氷見市立湖南小学校

活用方法などについて検討する。これらの研究成果を基礎に「地球市民的資質」を育てることを目指した単元開発と，「ジグソー学習」を取り入れた授業実践を行う。そして，プリテスト・ポストテストを通して，開発した単元の有効性と地球市民的資質の育成の可能性について検証する。

２　日本の国際理解教育の歴史と分類

戦後から1990年までの日本の国際理解教育は，ユネスコの国際理解教育[3]や日本型の国際理解教育，開発教育[4]，環境教育などが混在した時代であった。そんな中，1974年に日本の国際理解教育の方向を決める大きな選択が行われた。中教審が「国際社会に生きる日本人」の育成を勧告し，ユネスコが「国際教育に関する勧告」を出したのである。日本は中教審の勧告に基づく日本型の国際理解を選択し，異文化理解や外国語教育の推進，海外子女・海外帰国子女教育が国際理解教育の中心に据えられた。その流れは現在にまで受け継がれ，国際理解教育本来の領域や内容の学習を妨げている場合も多く見られる。

1990年代以降にグローバル教育[5]，シティズンシップ教育[6]，ESD[7]などが生まれた。その背景には，グローバル化の進展によって人々の国境を越えた地球規模で移動が顕著になった結果，それぞれの国家の多民族・多人種化が進み，民族・人種構成の変化が国家体制にまで影響を及ぼすようになったことがある。日本も例外ではなく，都市部だけでなく，地方の地域社会においても多文化化が顕著に見られるようになり，人々はこの生活環境の変化に対応していくために，従来のナショナル・アイデンティティを再検討する必要に迫られている。これらの課題を解決していくために必要なのが，地球市民としての資質の育成である。教育現場には，グローバル教育やESDの考え方も取り入れ，地球市民的資質の育成を目指した国際理解教育を着実に行うことが求められている。

３　学習指導要領から見る国際理解教育の変遷

小学校社会科における国際理解教育の学習内容が時代とともに，どのように変化したかを明確にするために，小学校の歴代社会科学習指導要領の国際理解教育に関連する記述内容の変化を捉える。社会科の学習指導要領は，今日に至るまで８回の改訂が行われており，その時代における社会の要請が多く反映されている。

分析に当たっては，歴代の学習指導要領を小林恵氏の時期区分［小林　恵 2007］を参考に，９つの学習指導要領を昭和20年代（昭和22年・昭和23年補説，昭和26年），昭和30年度版から昭和52年度版（昭和30年，昭和33年，昭和43年，昭和52年），平成元年度版から平成20年度版（平成元年，平成10年，平成20年）の大きく３つの時期に分けて分析する。

⑴　昭和20年代の学習指導要領の分析から明らかになったこと

昭和22年度版の学習指導要領から社会科がスタートしたが，当初から学習内容に国際理解教育に関連する内容が位置づけられていた。22年度版は戦後の連合国による占領下という状況もあったが，５，６年生で平和や文化理解について学習が行われていたことが分かった。23年度の補説や26年度版では，22年度版の内容に加えて外国との経済的な相互依存関係の学習も行われるようになっていたことが明らかになった。

⑵　昭和30年度版から昭和52年度版の分析から明らかになったこと

昭和30年度版から52年度版まで，国際理解に関する内容が５，６年生で分けて扱われたり，６年生でまとめて扱われたりした。その際には，国内での工業生産や農業生産と外国との経済的なつながりを区別して扱う傾向が見られるのも特徴である。しかし，何より昭和43年度版で，６年生の目標の第一番目に「国の政治のたいせつなはたらきや世界の平和に対する人々の願いなどを理解させるとともに，世界の諸地域で特色ある生活が営まれている様子に関心を深め，国際理解の基礎を養う。」と国際理解教育に直結する内容が明記されたことは画期的な出来事と言える。この流れはその後も続き，最新の平成20年度版においても順番は二番目になったが，６年生の目標に国際理解教育に関連する内容が明記されている。

昭和30年度版から52年度版で扱われた国際理解教育に関連する学習内容は，昭和20年代と同じく，経済的な相互依存関係や文化理解，平和の三つを中心に構成されていることも明らかになった。

⑶　平成元年度版から平成20年度版の分析から明らかになったこと

平成元年度版では，国際理解教育に関連する学習で大きな変化が見られた。３年生の内容の取扱いで，「地域の生活が国内の他地域だけでなく，外国ともかかわりがあることを気づかせるよう配慮するものとする。」と記載されたのである。さらに４年生においては，内容，内容の取扱いの両面で外国とのかかわりについて記載されるようになった。これまで，５年生以上でしか見られなかった国際理解教育に関連する学習内容が，地域学習を中心とする３・４年生にまで広がったのである。これは，３・４年生の内容をまとめて弾力的に扱うようになった平成10年度版，最新の平成20年度版においても受け継がれている。

平成元年度版から平成20年度版において扱われている国際理解教育に関連する学習内容は，昭和54年度版まで

の経済的な相互依存関係や文化理解，平和に人権，環境，開発も加えて構成されていることが明らかになった。

歴代の学指導要領の内容の分析を通して，国際理解教育に関連する学習が，初期社会科のころから位置づけられていたことが分かった。また，その学習対象が時代とともに高学年から，地域学習を主とする中学年へと広がったことも明らかになった。さらに，その学習内容が時代の変遷とともに，文化理解や経済的な相互依存関係から領域を広げ，平成20年度版では，ESDとの関連から学習内容の観点を取り上げようとする動きも見られるようになった。グローバル化の影響を受け，学習指導要領の内容もその流れに対応してきていることが見て取れる。小学校社会科における国際理解教育に関連する内容の占める割合が次第に高まってきていることが明らかになった。

4　ジグソー学習の概要と可能性

子どもたちが主体的に学んでいくためには，学習内容と学習方法が両輪となって働く必要がある。また，「私たちが教育においての文化の多様性に関心があり，文化の多様性に言及するカリキュラムをもつならば，教室での学習スタイルやアプローチにも多様性がなければならない」とのセルビー［セルビー，D. 1996, p10]の考えにも基づき，単元の開発にあたっては，「ジグソー学習(Jigsaw Method)」を取り入れることにした。

ジグソー学習は，1970年頃アメリカで生まれた。当時のアメリカでは民族間や人種間の諸問題が教育の現場に深刻な問題を引き起こしていた。ジグソー学習はそんな中で生まれた協同学習[8]のプログラムの一つで，カリフォルニア大学サンタ・クルズ校の社会心理学者エリオット・アロンソン教授を中心としたグループによって開発された。ジグソー学習のネーミングは，ジグソーパズルからきており，子どもたちが課題別に分かれて調査したことを持ち寄り伝え合うことで，パズルが完成するがごとくより完成された知識や技能を得ることができることからネーミングされた［アロンソン, E. 1986, pp.1-8]。「ジグソー学習」は，アメリカにおいて，教育現場での人種差別問題を解決するために行われた様々な取り組みの中から生まれてきた学習方法の一つといえる。

ジグソー学習にはいくつかの形態があるが，基本的には，ジグソーグループと追究グループ（カウンターパート・グループ）から成り立っている。図１はアロンソンの理論をもとに筆者が作成した最も基本的なジグソー学習の形態である。

ジグソー学習は，生活指導と学習指導の両面を充実させることをねらいとしている。「子どもがお互いを好きになる」，「学校が好きになる」，「自尊心が高まる」，「競争的な感情が減少する」，「他の子どもから学ぶことができるということを信じる」，「学業成績が向上する」，「相手の立場にたって考えることができる」などのメリットがあることがアロンソンの検証から確認されている[アロンソン,E. 1986,pp.99-131]。また，「責任感」，「参画する態度」，「表現する力」を伸ばすということも大富中学校の実践から検証されている[筒井昌博 1999, pp.12-14]。

一方，ジグソー学習を学級に導入するためには前提条件が必要であることも明らかとなっている[アロンソン,E. 1986,pp.25-55]。効果のあるジグソー学習を導入したいなら，多様な人々，グループ構成，チーム作りを援助するとともに，多様な調査活動が可能な学習内容を構成すること。さらに，教師が自分の役割を自覚するとともに，グループ・リーダーの育成・訓練を行うことが必要である。

日本では，本格的にジグソー学習の研究に取り組んだ大富中学校の事例を除くと，小学校，中学校を問わずジグソー学習の実践例はわずかしかない。それは，「授業(学習活動）の場では，個人の学習が大切にされ，あまり『協力』して学習することが求められてこなかったことが大きな原因ではないだろうか。」[筒井昌博 1999, p14]と筒井は分析している。さらに小学校では，ジグソー学習を行うことが子どもたちの発達段階から考えて難しい場合もあるため，積極的に取り組まれることが少なかったのではないかと筆者は考える。

現在の日本における教育の問題点として学力の二極化，教室内の構成の多様化，多文化的状況などが上げられている。この現状には，アロンソンがジグソー学習を開発した1970年代のアメリカにおける状況と共通する部分がある。今こそ，ジグソー学習の有効性を再確認し，日本の学校教育の現場に積極的に取り入れる価値があるのではないかと筆者は考える。日本ではグループ学習の伝統があり，集団学習の素地が十分に整っている。しかし，日本でこれまで行われてきたグループ学習は，同じ課題をもつ子どもが集まって調査をしたり，調査したことを話し合ったりする活動が多かった。そのため，活発な子どもがグループ活動をリードする一方で，終始聞き役に徹する子どもたちの存在を生み出していた。ここにジグソー学習を取り入れることにより，だれもが平等に調査したり，発表したりする機会が生まれる。そして，学習の成果をより多くの子どもたちが享受できるようになるのである。教師がその仕組みを理解し，事前の準備をしっかりと行ってジグソー学習を実施すれば，学力の二極化，教室内の構成の多様化，多文化的状況などに対して，大きな成果が期待できるはずである。

5　地球市民的資質を育てる社会科の授業実践

⑴　小学校段階における地球市民的資質とは何か

現代の社会ではトランスナショナルなひとやものの移動がごく自然に行われるようになった。当然のことながら日本もその渦中にあり，多くの国との間で原材料や製品を輸入したり，製造した製品を輸出したりしている。生産拠点を海外にシフトする企業も数多く多く見られるようになった。ひとの移動もより活発になり，多くの外国人労働者（日系人も含む）が来日し，日本国内の多文化化が著しく進展している。世界中の国々が，地球規模で複雑に結びつてきているのである。一方で，地球規模で解決に取り組まなければならない環境問題や戦争・紛争などの問題の存在もある。地球温暖化の問題を例に挙げても，それは一国だけの力では解決することが不可能であることは明らかである。地球を一つの大きなシステムとして捉え，問題の解決に取り組むしかない状況になっており，その前提条件が地球市民的資質の育成である。

地球市民的資質とはどんな資質を指すのであろうか。大津和子はその資質として，ワールド・スタディーズを基に①世界を相互に関連し合うシステムとして理解する，②世界には異なる視点をもつ人々が存在することを考慮する，③人権，公正の観点から社会の問題をとらえ，地球環境にも配慮する，④望ましい変化をもたらすために社会に積極的に参加する，⑤学習においては結果よりプロセスを重視することなどを挙げている（大津和子「地球市民的資質」）[大津和子，溝上泰　編 2000，p 34]。

小学校の段階で，どのような地球市民としての資質を育てなければならないのであろうか。大津が述べるところの地球市民的資質を小学校段階の子どもたちに身につけさせることは困難であるが，小学生なりの地球市民的資質を身につけることは非常に大切なことと考える。筆者は大津の考えを基に小学校段階での地球市民的資質を「グローバルな視点で事実をとらえて理解し，身近な地域から取り組みができる態度・能力」と捉えることにする。世界の国々はつながり合っている事実を知り，世界で起こっていることは自分の生活とも関係があることを理解することは小学生でも十分に可能である。そして，一人一人が意識して，地道な取り組みを続けることでのみ，持続可能な発展が現実のものとなるのである。

⑵　実践に直結する学習指導要領の内容

授業実践では，単元「世界の中の日本」を取り上げることにする。平成10年度(現行)学習指導要領の「目標」，「内容」，「内容の取扱い」で単元「世界の中の日本」について整理すると表１のようになる。

表１　単元開発に直結する学習指導要領の記述　第６学年

＜目標＞ ⑵　日常生活における政治の働きと我が国の政治の考え方及び我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし，平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにする。
＜内容＞ ⑶　世界の中の日本の役割について，次のことを調査したり地図や資料などを活用したりして調べ，外国の人々と共に生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であること，世界平和の大切さと我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考えるようにする。 ア　我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子。 イ　我が国の国際交流や国際協力の様子及び平和な国際社会の実現に努力している国際連合の働き。
＜内容の取扱い＞ ⑶　内容の⑶については，次のとおり取り扱うものとする。 ア　アについては，我が国とつながりが深い国から数か国を取り上げること。その際，それらの中から児童が一か国を選択して調べるよう配慮し，様々な外国の文化を具体的に理解できるようにするとともに，我が国や諸外国の文化や伝統を尊重しようとする態度を養うこと。 イ　イの「国際交流」についてはスポーツ，文化の中から，「国際協力」については教育，医学，農業などの分野で世界に貢献している事例の中から，それぞれ選択して取り上げ，国際社会における我が国の役割を具体的に考えるようにすること。 ウ　イの「国際連合の働き」については，網羅的，抽象的な扱いにならないよう，ユニセフやユネスコの身近な活動を取り上げて具体的に調べるようにすること。 エ　ア及びイについては，我が国の国旗と国歌の意義を理解させ，これを尊重する態度を育てるとともに，諸外国の国旗と国歌も同様に尊重する態度を育てるよう配慮すること。

※　平成10年度版学習指導要領をもとに筆者が作成

平成10年度（現行）学習指導要領では，内容⑶は，ア，イの２つの項目から構成されている。そのため，本単元ではアに対応する内容を日本とつながりの深い国について学習する小単元で，イに対応する内容を，世界の平和のために日本が果たすべき役割について学習する小単元内容を構成することにした（なお本章以降，アに対応する小単元を「小単元Ⅰ」，イに対応する小単元を「小単元Ⅱ」と記すことにする）。

⑶　単元「世界の中の日本」の構造

ア　小単元Ⅰについて

小単元Ⅰ（日本とつながりの深い国）について従来行われてきた学習では，子どもたちが調べたい国を決め，国別のグループで調査活動を行い，代表者が調べたことを発表したり，ポスターセッション形式で調べたことを伝えたりして単元を終えることが多かった。しかし，このような学習では，調べる視点が様々で，つながりが見えにくく，自分が調べていない国に対する理解が不十分になることがあった。日本と世界の国々の間にどのようなつながりがあるのかを考えるためには，まず主な国の特徴をしっかりと理解することが大切である。その上で経済的，文化的視点から日本とのつながりを調べたり，これからの関係のもち方について話し合ったりする活動へと学習を発展させることが大切である。

そこで，子どもたちが各国の特徴をしっかりと理解できるように３つの工夫を行う。一つ目は，範例として韓国を取り上げて全員で調べを進め，調査の観点を明確にすることである。視点を知ることで次の調査にそれを生かすことができる。二つ目は，アウトリーチ教材[9]の活用である。実物があることで，日本の生活習慣との比較をしながら，文化や生活様式の共通点や相違点を明らかにすることができる。三つ目は，ジグソー学習の導入である。アメリカ，中国，サウジアラビア，ブラジルの４つの国の中から一つ選び，選んだ国について韓国を調べた経験も生かして一人一人が追究グループで責任ある調査を行う。そしてジグソーグループに戻り調査内容を報告し合う中で，４つの国についての確かな理解の成立が期待できる。これらを基に，つながりが深い国々と今後どのように付き合っていくべきかについて考えを深めていきたい。

イ　小単元Ⅰ「日本とつながりの深い国」の概要（全10時間）

本小単元は三次（全10時間）で構成されている。以下各次の概要について説明する。

＜第一次＞　韓国ってどんな国（３時間）

日本から近い外国の一つである韓国について知っていることを出し合うことから学習はスタートする。韓国について知らないことも多いことが明らかになった上で，資料や図書室の本，インターネットを活用して詳しく調査する（その際に調査の視点を子どもたちと確認し，最低限その視点について調べるようにする）。次に，韓国について調べたことをもとに，韓国とはどんな国なのかを話し合う。その際には，アウトリーチ教材の「みんぱっく[10]」も活用し，実物を通して，日本と韓国の生活や文化の共通点や相違点を確認できるようにする。その後，調査の結果のなどをもとに，韓国は日本とつながりのある国と言えるのかを話し合う。第一次では，調査の観点をしっかりと理解すること，中でも日本と調査対象とする国のつながりを意識できるようにしていくことにウエイトを置く。

＜第二次＞　日本とつながりの深い国を選んで調べよう（５時間）

第二次では，第一次での経験も生かしてジグソー学習を実行する。はじめに，４人でジグソーグループをつくり，グループ内でアメリカ，ブラジル，サウジアラビア，中国のどの国を調べるか役割分担をする。次に，同じ国を調べる子どもが集まって追究グループをつくり，調査活動を進める。その際には，韓国の調査で使用した調査の視点を活用する。追究グループでの調査活動が一段落したら，調査から分かったことを，もとのジグソーグループで報告することも考えてまとめる。場合によっては報告の練習も行う。その後，ジグソーグループに戻り，追究グループでのまとめを基に，調査内容を報告したり，その内容についての質疑応答を行ったりする。

＜第三次＞　つながりの深い国とどう付き合っていけばよいのだろう。（２時間）

第一次の学習や，第二次のジグソー学習で得た知識をもとに，調査してきた５つの国と日本とのつながりの深さをランキングし，その理由を全体で話し合う。ランキングを通して，５つの国のどの国とも深く結びついていることが明らかになり，順位付けは難しいことが見えてくるはずである。学習の最後の段階では，なぜ，いろいろな国とのつながりを大切にしなければならないのかを考えて学習を終える。

ウ　小単元Ⅱについて

小単元Ⅱ「世界の平和と日本の役割」では，世界規模で問題となっている事柄（グローバルイシュー）を捉え，それらを解決するための国連や青年海外協力隊などの取り組みについて調べて学習を終えることが多かった。

本小単元では，子どもたちがグローバルイシューを明確に捉え，それに対する取り組みを調査を通してしっかりと理解できるように，２つの工夫を行った。一つ目は，単元の最初にグローバルイシューの解決に取り組んでいる組織としてＮＧＯ団体「国境なき医師団」を取り上げることである。「国境なき医師団」には日本人スタッフもおり，その活動の中心が紛争・戦争，天変地異などで犠牲となった人々（特に子ども）の命を救うことなので，子どもたちがより身近に活動内容をとらえることが可能

だと考えたからである。二つ目は，ジグソー学習の導入である。グローバルイシューについて調査を行う段階でジグソー学習を取り入れ，調査や報告の活動を通して，すべての子どもたちが主なグローバルイシューについて正しい理解ができるようにする。問題に対する正確な認識があってはじめて，問題の関連性を考えたり，問題の解決に自分は何ができるのかを考えたりすることが可能になるからである。

エ　小単元Ⅱ「世界の平和と日本の役割」の概要　（全８時間＋課外）

小単元Ⅱは三次(全８時間＋課外)で構成されている。以下各次の概要について以下各次の概要について説明する。

＜第一次＞　国境なき医師団とは何だろう（３時間＋課外）

第一次の最初に国境なき医師団が使っている「命の腕輪」を提示し，その役割を考える。次に国境なき医師団の存在を知るとともに，資料を通して活動を理解することに重点を置く。(特に子どもたちの命を守ることを重視していることに目を向けられるようにする。）次の段階では，資料を通して，国境なき医師団が活動している国々で，子どもたちが命の危険にさらされている理由を考える。その後，地球規模で子どもたちのために活動している他の団体や組織を探して，その活動内容について授業時間だけでなく，放課後や家庭学習（課外）の時間も使って調べる。そして，なぜ地球規模で問題解決に当たらなければならないのかについて考える。

＜第二次＞　地球規模で解決に当たるべき問題にはどんなものがあるのだろう（３時間）

第二次では，地球規模で解決に当たらなければならない問題にはどんなものがあるのかを探る場面でジグソー学習を取り入れる。小単元Ⅰと同じように，４人のジグソーグループを作り，調べるテーマの役割分担を決めた後，課題別の追究グループに分かれる。追究する課題は，地球環境の問題，地球温暖化の問題，貧困の問題，戦争や紛争の問題の４つに集約し，追究グループで調査活動やまとめの作業を進める。その後，ジグソーグループに戻って調査内容の報告をするという一連の活動を行う。

＜第三次＞　地球規模の問題を解決するために何ができる（２時間）

第三次では，はじめにジグソーグループでの調査報告から分かったことを整理したり，疑問について全体で話し合ったりする。地球規模で問題の原因や関連性，現状や対策を明らかにする中で，そんな問題の解決のために自分は何ができるかを考え，単元をまとめる。

※二つの小単元の詳しい展開については資料１，２を参照

⑷　単元「世界の中の日本」の分析

単元「世界の中の日本」について平成20年1月に氷見市立湖南小学校６年生を対象に授業を行った。単元「世界の中の日本」の実践を試みた後，子どもたちにどんな変容があったのかをプリテスト・ポストテスト（資料３を参照）を通して分析する。

ア　小単元Ⅰのプリテスト，ポストテストから見る子どもの変容

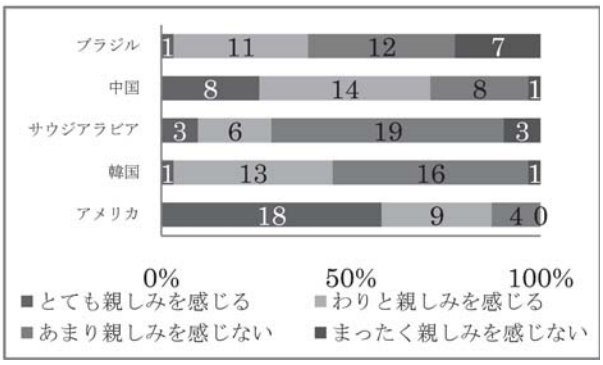
つながりのある国についてどの程度理解しているかを把握するために，「アメリカ・韓国・サウジアラビア・中国・ブラジルの５つの国について人物，歴史，生活など知っていることを自由に書いてください。」という設問を授業級31人の子どもたちに投げかけた。プリテストでは５つの国すべてに書くことができた子どもは10人（32%），４つの国に書くことができたのは９人（30%），３つの国に書くことができたのは３人（10%），２つの国に書くことができたのは５人（16%），１つの国にしか書くことができなかったのは４人（13%）という結果になった。多くの子どもが知っていることを書くことができたのはアメリカや中国，韓国であった。その記述の内容は，それまでに学習した歴史と関連するものも多かったが，韓国と北朝鮮を取り違えていたり，サウジアラビアは貧しい国と捉えていたりするなど，中途半端な理解のもとで回答しているものも見られた。一方，実践後のポストテストでは，全員が５つの国について知っていることを書くことができるようになった。また，その記述の内容も「サウジアラビアから石油を多く輸入している」，「ブラジルとは100年も前から移民を通してつながりがある」など人のつながり，経済的つながりなど視点から具体的な記述が多くなった。これは，ジグソー学習を行ったことにより，自分が調べた国だけでなく，他の子どもが調べた３つの国のこともよく理解できたからである。

次に，子どもたちに「身の回りの物やできごとなどから外国とのつながりを感じることがありますか。」と問うた。プリテストでは，31人中30人があると答え，ポストテストでは31人全員があると答えた。子どもたちは日々の生活を通して，外国とのつながりを意識していることが明らかになった。しかし，その理由を記述したものを分析してみると，プリテストの段階では，「外国人を見かけるから」，「スーパーで外国産の食品が売られているから」といった漠然としたものが多かった。一方，実践後のポストテストでは，「食品を外国からの輸入にたよっているから」，「ファーストフードなど外国からの文化が日本にもたらされているから」，「ブラジルに多くの移民が行ったり，反対にブラジルから日系人が働きに来たりしているから」といった具体的な記述が多く見られた。小単元Ⅰの学習を通して，外国との相互依存関係を意識できるようになったことが分かる。

最後に，５つの国に対して感じる親しみの度合いを調

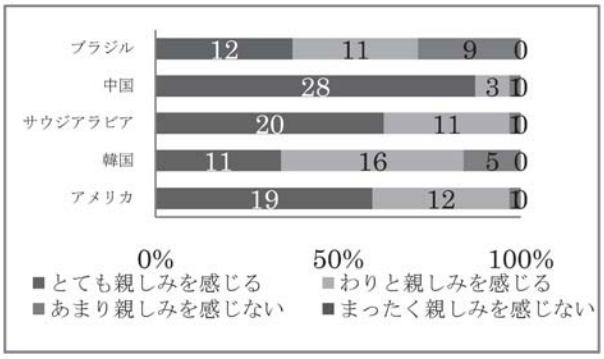
査した。図２はプリテストの結果である。小単元Ⅰの実践前にアメリカや中国に対しては，過半数の子どもたちが親しみを感じていたが，サウジアラビアやブラジルに対して親しみを感じていた子どもが少ないことが分かる。

図２　５つの国に対して感じる親しみの度合い



※　プリテストの結果をもとに筆者が作成

図３　５つの国に対して感じる親しみの度合い



※　ポストテストの結果をもとに筆者が作成

図３は実践後に行ったポストテストの結果である。全体的に見ると，親しみを感じる度合いがアップしており，「まったく親しみを感じない」がどの国においても０％となっている。次に，個々の国で変化が大きかったものを取り上げる。ブラジルに対しプリテストの段階では40％の子どもしか親しみを感じていなかった。しかし，学習から100年以上も前から移民を通したつながりがあったことも分かり，親しみを感じる度合いが70％まで増加した。サウジアラビアに対してプリテストで親しみを感じていた子どもは30％程度で，５か国中最下位であった。しかし，学習を終えた段階ではアメリカ，中国と並んで親しみを感じる子どもが97％と驚異的な増加となった。日本とは生活習慣や文化の面で異なることが多いサウジアラビアであるが，石油を通したつながりの大さを理解できたことがその背景にある。中国に対しては，調査を通して食品はもちろんのこと，衣類や雑貨など多くの品物が日本に輸出されており，日本の輸入額ではアメリカを抜いて第１位になっていることも明らかになった。経済的なつながりに加え，歴史的なつながりも深い中国への親しみの度合がより高くなったといえる。

以上のことは，それぞれの国の成り立ちや文化，生活習慣，学校の様子，民族間の問題，地理的状況，日本とのつながりなどの事実を正しく理解させることの大切さを物語っている。ジグソー学習を通して，主体的かつ協同的に学習したことで判断材料が増え，総合的な判断をすることが可能となる。また，学習の最後に日本とつながりの深さをランキングを通して考えたことも，蓄積してきた知識を再構築して判断するために有効に働いたのではないだろうか。

イ　小単元Ⅱのプリテスト，ポストテストから見る子どもの変容

世界の国々が協力して解決に当たらなければならない問題とその解決方法を問う設問を出題した。その設問に対する子どもたちの回答結果を整理すると，プリテストでは表２のように，ポストテストでは表３のようになった。

表２　設問に対する回答（プリテスト）☞回答数30

指摘した問題	人数（複数解答）	おもな解決方法
食品問題	１５人	・もっと検査を厳しく行う。 ・中国と話し合ってもっと仲良くなるようにする。 ・中国にやり方を伝え，悪いところをなくす。
地球温暖化問題	１０人	・みんなが協力してCO_2をあまり出さないようにする。 ・むだなごみを出さないようにする。 ・みんながエコに取り組む。
資源の問題	３人	・ガソリンを値下げしてもらうようにたのむ。
戦争・紛争の問題	２人	・みんなが仲良くする。 ・わからない
栄養不足の問題	１人	・食料を提供したり，食料を買うためのお金を提供したりする。
無答	８人	

※　プリテストの結果をもとに筆者が作成

表３　設問に対する回答（ポストテスト）☞回答数31

指摘した問題	人数（複数解答）	おもな解決方法
地球温暖化問題	２５人	・人の考え方から変えていく。 ・節約することが大切，お金もたまるし，無駄はいけないと思いごみもださない。まさに地球にやさしい。 ・日本もCO_2の排出４位だから，協力してなるべくCO_2を排出しないようにする。

貧困問題	２１人	・貧しい国へ応援に行って，助けてあげる。 ・ユニセフなどの募金に協力することがよい方法だと思う。 ・余っている食料を寄附する。食べ残しをしない。 ・戦争や紛争によって貧しくなる国もあるから，戦いをやめるように呼びかける。
戦争・紛争の問題	１２人	・その国のことをみんなでよく知る。 ・貧困問題と関係があるので，募金などをして貧困をなくす。 ・国連の活動をもっと活発に行う。
砂漠化の問題	１０人	・植林の活動をする。 ・森林資源を大切にし，むだに使わない。
森林伐採の問題	１０人	・日本の木を切って，外国の木をあまり使わないようにする。 ・森林が減った国に木を植えて，緑を増やすようにする。 ・ノートなどの紙は木が材料だから，リサイクルして木を大切にする。
環境汚染の問題	６人	・一人一人の人間が自然を大切にして，動物などの住みかを奪わないようにする。 ・日本のような進んだ技術を持つ国が，教えてあげる。
食料問題	３人	・中国から輸入された食品の安全性を守るためにも，しっかりと検査をしてほしい。
資源の問題	１人	
無答	０人	

※　ポストテストの結果をもとに筆者が作成

表２，３の内容を分析する。本実践を行おうとしていた平成20年１月には「中国製の冷凍餃子の毒物混入問題」がよく報道されていたためか，プリテストの段階ではそれを指摘する子どもが多く見られた。しかし，実践後のポストテストの結果では，直前に起きた問題を指摘する子どもは減少し，それ以外の多様な問題を取り上げる児童が多くなった。問題を指摘しているのべ人数もプリテストの31人から，ポストテストでは88人と大幅に増加している。さらに，無答者の人数もプリテストの８人から，ポストテストでは皆無となった。また，指摘した問題に対する解決方法について，戦争・紛争の問題を例に挙げると，実践前のプリテストでは「みんなが仲良くすればよい」と具体化するには乏しい解決策を述べていた。しかし，ポストテストの段階では貧困問題など戦争や紛争を引き起こす原因に触れたり，国連の戦争や紛争を解決するための働きに触れたりするなど問題を論理的に分析し，具体的，客観的に対策を記述する子どもが多くなった。これは，実践を通して地球規模の様々な問題の存在に気づき，それらの問題を解決していくことの必要性をとらえることができたからと解釈できる。また，戦争や紛争が貧困問題の原因となったり，反対に貧困問題が戦争や紛争の原因になったりする場合もあるなど諸問題間の相互の関連性を指摘している記述も見られた。一つの問題を理解するだけでなく，相互の関連にまで目を向けることができたのは，ジグソー学習によって，一人一人が追究グループにおいて情報を集め，ジグソーグループのメンバーにしっかりと伝えることができたからこそといえる。

また，プリテスト，ポストテストの両方に「世界の国々が協力して解決していかなければならない問題に対して自分は何ができるか」という問いを設けた。その回答結果を分析すると，プリテストでは当然のことながら，回答数は少なく「日本の高い技術を世界の国に役立てる」との内容の記述があった子どもが32人中５人にすぎず，残りの子どもたちは無答であった。しかし，ポストテストでの同じ問いに対する回答数は32人中29人に増加した。代表的な回答をまとめたのが表４である。

表４　実践後の自分ができそうなことに対する記述

・環境や地球温暖化の問題（森林資源を守ると書いた数も含める）も自分から行動をしなければならない。・・・・・・・・・・・・・８人
・ユニセフなどに寄付をして，同じ人間を助けたい。・・・・・・・５人
・小さな心構えだけど，ゴミを分別や，リサイクルに取り組む。・・５人
・自分のできることや，今の世界の状態を知る。・・・・・・・・・３人
・他の国の状態を知った上で，外国の人と交流する。・・・・・・・２人
・将来青年海外協力隊などに参加し，困っている人を助けたい。・・２人
・電気の無駄遣いをなくし，エネルギーを大切にする。・・・・・・２人
・いろんな問題の原因は一人一人の人間だから，もっと世界のことをよく知って，頭を良くしていかなければならない。・・・・・・・１人
・できるだけのことはやり，できるだけたくさんの人の命を助けたい。問題を解決するには身近なところからやっていく。・・・・・・・１人

※　ポストテストの回答から筆者が集約

まず自分から行動すること（世界の情勢を知ることも含め）の大切さを理解した記述が多い。また，グローバルイシューのことを知りながらも，自分ができることから始めていこうとする態度も読み取ることができる。授業実践を通して，自分の足もとから地球規模の問題を捉え，小さなことでも取り組もうとする子供たちの姿が見て取れる。わずかではあるが，地球市民的資質を身につけることができたのではないかと思われる。

⑸　小学校社会科における国際理解教育の可能性

小学校６年社会科で行う単元「世界の中の日本」で，地球市民的資質の育成を目指した単元開発と授業実践に取り組んだ。そして，本単元の目標が達成できたかについて，プリテスト・ポストテストの結果の変容をもとに，本単元の有効性について分析した。その結果，小単元Ⅰでは，５つの国の成り立ちや文化，生活習慣，学校の様子，民族間の問題，地理的状況，日本とのつながりなどの事実を正しく理解することができた。小単元Ⅱでは，グローバルイシューへの解決に向けて自分ができそうな

ことに対する子どもの解答数（クラス成員31人）が，プリテスト段階では５であったものが，ポストテストでは29に増えるだけでなく，その回答内容も具体的になるなど，子どもたちの行動や態度の面で大きな変化と変容が見られた。ジグソー学習を取り入れた本単元による授業実践は，地球市民的資質の育成に十分に効果があったと言える。さらに，一人一人が責任をもった追究活動を行うことにより，グループ内で協同しグローバルイシュー解決に向けての確かな理解を得ることもでき，知識の定着と活用の面でも大きな成果が確認できた。

グローバル化の進展によって，今日の小学校社会科の学習においても，地球市民的資質の育成が重要性を増してきている。本実践を通して小学校社会科の学習で，国際理解教育の領域や内容にかかわる学習が十分に可能になることが明らかになった。さらに，ジグソー学習の活用で，より充実した学習が可能になることも確認することができた。

６　今後の研究の課題と展望

本研究では，小学校社会科という教科の枠の中で検討を行った。グローバルイシューの解決のために積極的に社会に「参画」していく態度を育てるためには，もう一つの車輪である総合的な学習の時間との関連を図っていくことが必要であることは言うまでもない。今後は，国際理解教育における社会科と総合的な学習の時間をどう関連させたら効果的になるかについても探っていきたい。また，中学校における国際理解教育の取り組みも分析することが必要である。小学校での国際理解教育の内容をいかに中学校での取り組みにつなげていくべきかについても研究を進めたい。さらに，ジグソー学習は本来，学習指導と生活指導の両面を充実させることをねらいとしているが，本研究では「地球市民的資質の育成」を主な目的としたため，学習指導面に重点を置いて活用したり，検証を行ったりした。今後は，生活指導の面も関連させてジグソー学習の可能性を探っていきたい。

世界のグローバル化が，これから一層進展することは明白であり，日本国内においても経済面や環境面，人種・民族構成面など様々な分野でその影響が顕著に表れてくることが予想される。小学校社会科（その基準となる学習指導要領も含め）もそんなグローバル化の進展に対応して，さらにその学習内容を見直していくことが求められよう。特に社会科では，公民的資質の育成がその主たる目標となっているが，公民的資質の中に占める地球市民的資質の割合が高まっている。小学校社会科の中で，国際理解教育を行う素地が整ってきたといえよう。

今，地球市民的資質をもち，主体的に生きていくことのできる子どもの育成が教育現場に課せられた大きな命題といえる。その主たる受け皿になるのが教科としての社会科である。本研究を通して筆者は，まだ不十分であるが，社会科学習における地球市民的資質育成の可能性の一端を検証できたと自負している。

註

1　日本国際理解教育学会(2006)『グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究』第２分冊　1－36ページ

2　平成10年12月に告示された現行学習指導要領小学校社会科の目標より。
なお，平成20年度版の学習指導用要領では，現行学指導要領とほぼ同様に，小学校社会科の目標を以下のように記載し，国際社会で必要な公民的資質について取り上げている。
＜目標＞
社会生活についての理解を図り，我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て，国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

3　日本の国際理解教育は，ユネスコ協同学校計画（UNESCO Associated Schools Project，以後「ASP」と略記する）とともに始まった。日本はASPが始まった1953年当初から計画に参加し，文部省内に置かれた日本ユネスコ国内委員会が中心となってプロジェクトを進めた。当初は実験校と言われ６校からスタートしたが59年には研究校となり参加校は25校，60年からは共同学校と呼ばれるようになり，人権尊重，他国・他地域理解，国連の理解の三つの柱の中からテーマが選ばれて研究が進められた。

4　開発教育の概念は，東西冷戦が終結した1960年以降に生まれた。その背景には，長い間植民地支配を受けてきたアフリカ諸国が独立を果たすなかで，それまで抱えてきた貧困や栄養不足，疾病といった問題が一気に表面化したことがある。さらに，プランテーションに代表されるモノカルチャー経済や，独立後も続く元支配国との一方的な貿易関係から抜け出せない状況が，先進国との経済格差をより広げたことなどが挙げられる。

5　グローバル教育という用語は，1970年代にアメリカ合衆国で生まれた。それまでの国家中心主義に彩られた従来の教育を見直し，地球的な立場から教育を捉えなおそうとする教育活動である。日本においては，世界が急速にグローバル化する中で，永井滋郎が文化理解的アプローチと問題解決的アプローチに多様な国際理解教育を分類し，統合概念としてグローバル教育を提唱した。

6　シティズンシップの教育には様々な解釈が存在するが，共通するのは「自立」，「共生」，「参画」といった個人の成長を基盤にしている点である。開発教育やグローバル教育とはスタート地点がまったく異なってい

るが，目指すところは，共通する部分が多々あることは明白である。

7　「国連持続可能な開発のための教育の10年」は，持続可能な開発の実現に必要な教育への取り組みと国際協力を，積極的に推進するよう各国政府に働きかける国連のキャンペーン（2005年～ 2014年）である。「持続可能な開発のための教育」を表す英語（Education for Sustainable Development）の頭文字をとって「ESDの10年」と呼んでいる。

8　ジョンソン, D.W.ジョンソン, R.T.　ホルベック, E.J.は協同学習を「自分自身と他の学友たちとの学びを最大にするために，小グループを使って一緒に勉強させる学習指導法のこと」との中で定義している。[ジョンソン, D.W.　ジョンソン, R.T.　ホルベック, E.J 1998，p.18]

9　アウトリーチ教材は，博物館の展示資料である「もの」を遠隔地の小中学校に送付してもらい活用するものである。

10　「みんぱっく」は，大阪府にある国立民族学博物館が提供しているアウトリーチ教材である。送られてくる大きなカバンの中には，世界各国，地域の民族衣装や生活の道具などと，それらにまつわる情報や解説がパックされている。現在「ソールスタイル」「アラビアンナイトの世界」などテーマ別に10種類のカバンが用意されている。
http://www.minpaku.ac.jp/museum/kids/minpack/outline.html（H21.10.7情報取得）

文献

- 日本国際理解教育学会(2006)『グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究』第2分冊 日本国際理解教育学会
- 永井滋郎(1989)『国際理解教育』第一学習社
- 小林恵(2007)『＜学習指導要領＞の現在』　学文社
- セルビー，D著，菊地恵子訳，河内徳子監訳 (1996) 日本国際理解教育学会『国際理解教育』VOL2　pp.6-25
- アロンソン，E著，松山安雄訳(1986)『ジグソー学級：生徒と教師の心を開く協同学習法の教え方と学び方』原書房
- 筒井昌博 編著 (1999)『ジグソー学習入門』明治図書
- 静岡県焼津市立大富中学校 (1996)『＜自分＞を意識しながら学ぶ生徒』明治図書
- 大津和子・溝上泰編(2000)『国際理解　重要用語の300の基礎知識』明治図書
- ジョンソン，D.W.　ジョンソン，R.T.　ホルベック，E.J著　杉江修治，石田裕久，伊藤康児，伊藤　篤 訳 (1998)『学習の輪』二瓶社

（2009年 8 月31日受付）
（2009年11月 6 日受理）

資料１　小単元Ⅰ「日本とつながりの深い国」の展開（全１０時間）

	教師による指示・発問	期待される子どもの反応
1	1　大韓民国について、どんなことを知っていますか。 ※子どもの発言を調査の視点が明確になるようにまとめる。	・日本から近い国の一つ。 ・飛鳥・奈良時代から日本とのつながりが深い国。 ・焼き肉やキムチなどの食文化がもたらされた。 ・サッカーワールドカップを日本といっしょに開催した。
2	2　大韓民国について、もっと詳しく調べましょう。 ※調査の視点をランキングし、順番を決めてから調査する。 ＜調査の視点＞ ・地理的条件、国旗の意味、生活習慣、学校生活、日本とのつながり ※韓国の調査のまとめとして、クイズを作ることを子どもたちに知らせる。	＜調査活動＞ ＜家庭＞ ・子どもたちが持っている**教科書、資料集、地図帳**などをもとに調査の視点にそって家庭で調査する。 ＜学校＞ ・家庭での調査の不十分なところを**教科書、資料集、地図帳**を使って見直す。 ・図書資料（学校図書、市図書館資料、みんパックの資料など）を活用して調べる。 ・ビデオ、インターネットを活用（インターネットのお勧めサイト一覧を配布）する。
	3　まとめとして調査をもとに、クイズを作りましょう。 ※まとめでつくったクイズを話し合いのきっかけとして活用する。	・韓国の国旗にはどんな意味があるのでしょうか。 ・韓国の食事をするとき、食器を持ってはいけない。○か×か。 ・韓国の学校も日本と同じ６：３：３制である○か×か。
3	4　韓国について調べたことを発表しましょう。 ＜みんぱっくの活用＞ ※みんぱっくの品物は、この段階で、子どもたちの発表内容を確認するために提示する。 ※どんな方法で調査したかを明確にする。 ※日本と比較しながら調べたことを発表できるようにする。	・年上の人を敬う儒教の思想がある。 ・焼き肉、キムチ、チジミなどの食文化が日本にももたらされている。 ・金属の箸、スプーンを使い、器をもち上げないのが韓国の食事のマナーである。 ・朝鮮半島の正装はチョゴリ。 ・韓国の学校は、日本とよく似ている。 ・韓国の小学校では、コンピュータや英語の授業が重視されている。 ・仏教や漢字など大陸文化が韓国から日本へやってきた。 ・韓国を植民地として日本が支配していた時代もあった。
	5　韓国は日本とつながりの深い国だといえますか。	・自分が思っていたより、進んだ国。生活は日本と変わらない。 ・良い意味でも悪い意味でも日本と歴史的につながりが深い国。 ・日本に対して、良いイメージをもっていないことを知ってショックだ。 ・学校の仕組みは日本と似ているが、韓国の受験は日本より厳しいようだ。 ・年上の人を大切にするなんて、今の日本ではあまり見られない。
4 5 6	5　ブラジル、アメリカ合衆国、中国、サウジアラビアから一つ選び、調べましょう。 ＜ジグソー学習＞ ジグソーグループ 課題の把握 調査内容の決定 ※追究グループで調査したことを、ジグソーグループに持ち帰り報告することを確認する。 ※追究グループごとに調査を進める。 追究グループ 調査活動 情報交換 報告準備	※４人のジグソーグループを作り、調査する国を決める。 ※調査の観点や調査方法は、韓国で行ったやり方を活かす。 **＜ブラジル＞** ・日本とは地球の反対側に位置する。世界で５番目に大きい国。 ・南半球にあるので、日本とは季節が反対だ。 ・アマゾン川のジャングルが知られている。 ・ポルトガル語が使われている。コーヒー豆の生産が盛ん。 ・リオのカーニバルが有名。 ・1908 年以来、合計 23 万 4000 人もの人がブラジルへ渡った。日本人（日系人）が最も多く暮らす国。 ・日系二世、三世が日本へ来て働いている。高岡市や射水市では、多くの日系ブラジル人が生活している。 **＜アメリカ合衆国＞** ・国旗のストライプは、独立した時点での州の数、星の数は現在の州の数。 ・世界で３番目に大きい国。農業、工業が盛ん。 ・多くの人種が生活している。 ・アメリカの子どもたちは、ほとんどがスクールバスで学校へ通っている。 ・フライドチキンやハンバーガーなど日本にももたらされている。 ・第二次世界大戦では、日本と戦かった悲しい歴史もあるが、戦後の日本に大きな影響を与えた。 ・日本とは貿易を通じて最もつながりの深い国。 **＜サウジアラビア＞** ・アラビア半島の大部分を占める。砂漠が多い。 ・気候は乾燥していて、雨があまり降らない。 ・国旗には「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒なり」と書かれている。イスラム教の教えが、国民の生活に大きな影響を与えている。 ・ラマダンといって、太陽が昇っている間は断食をしなければならない月がある。 ・公立の学校は大学まで授業料が必要ない。 ・日本は最も多くの石油をサウジアラビアから輸入している。

		＜中国＞ ・人口１３億人、世界一の人口を誇る。世界で４番目に大きい国。 ・4000 年の歴史のある国。日本との歴史的つながりも深い。遣隋使、遣唐使、元寇、日清戦争、日中戦争など。 ・餃子、炒飯など中華料理は、日本でもよく食べる。 ・服や野菜など多くの品物を中国から輸入している。日本から多くいの企業が中国に進出している。 ・一人っ子政策が行われている。兄弟がいないなんてさみしいだろうな。 ・中国の子どもたちは、朝から晩まで勉強している。 ・公害が大きな問題になっている。
7	6　追究グループで調べたことをまとめましょう。	※調べたことを項目ごとに分類したり、日本と比較したりしてまとめ、調査した国に対する自分なりのイメージをより確かなものにする。 ※ジグソーグループに戻り、調査結果のまとめをしっかりと伝えられるように報告の練習をする。
8	7　ジグソーグループに戻り、情報交換をしよう。	※追究グループから、元のジグソーグループに戻り、追究グループで調査したことを報告し、その内容について質疑応答を行い、自分が調べた国ばかりでなく、他の３つの国についても理解できるようにする。
9	ジグソーグループ 調査結果の報告 報告内容の質疑 8　これら 5 つの国と日本とのつながりをランキングしよう。 ※自分の生活とのかかわりから考えている視点を大切にしていく。	・私が着ている服をよく見ると、Made in China だった。私の生活にも中国が関係していた。スーパーでも、中国産の品物をよく見かける。 ・お母さんがよく見ていた「冬のソナタ」は、韓国でつくられたドラマだ。 ・マクドナルドやケンタッキーフライドチキンなどはアメリカから日本にやって来て、私たちの生活の中に自然に存在している。 ・たくさんの日本人がブラジルに移民していたなんて驚きだ。日本からは最も遠い国だけど、つながりは深いと思う。 ・暖房に使っている石油もサウジアラビアから、輸入されたものだ。
10	9　なぜ、私たちはいろいろな国とのつながりを大切にしなければならないのでしょう。	・石油なしで私たちの生活は考えられない。サウジアラビアなどの産油国とのつながりは大切だ。 ・アメリカ、中国、韓国、サウジアラビアは日本との貿易額が多い。日本は資源が少ないから、貿易なしでは生きていけない。それらの国とのつながりを大切にしないといけない。 ・日本では、工場で働く人が不足していて、それを日系ブラジル人が補ってくれている。これも、日本の産業にとってはありがたいことだ。 ・いろいろな国と仲良くしていくことが、私たち日本にとって大切なことだと思う。
	相手の国の文化をよく理解して、つながりを大切にしていくことが日本にとってとても大切なことだ。	

資料２　小単元Ⅱ「世界の平和と日本の役割」の展開（全８時間＋課外）

時	教師による発問・指示	期待される子どもの反応
1	1　「命の腕輪」を提示して、これは何か分かりますか。 ※「命の腕輪」という名前を伝える。 ※国境なき医師団が使用していることを伝える。	・数字が書かれている。色分けがある。 ・長さを測るものなのかな。 ・これでどうやって命のことを調べるのかな。 ・国境がないというのは、どういうことなのだろう。 ・どんな活動をしているのだろう。
	2　資料をもとに、国境なき医師団の活動を調べましょう。 ※ポスターを見て活動内容を考える。 ＜フォトランゲージ＞ ※パンフレットを配布する。 ※命の腕輪のレプリカを実際に使ってみる。 ※NGO について説明する。 ※多くの活動が子どもを対象としたものであることに目を向けさせる。 ※地図で「国境なき医師団」の活動場所を確認する。	・国境なき医師団は、NGO 団体で、世界 19 か所に支部がある。（日本にも） ・世界中から集まる医師や看護師によって活動が行われている。 ・助けを必要とする人々であれば、だれでも差別せず援助する。 ・活動の資金は寄付と公の機関からの資金に支えられている。 ＜活動内容＞ ・診療…病院や難民キャンプの診療所で、けがをした人々の診察・治療を行う。 ・外科手術…最低限の道具や薬だけで処置を行う。 ・栄養治療…栄養失調の子どもをピーナッツペーストを使って救う。 ・予防接種…予防接種を行い（はしか、ジフテリア、破傷風、ポリオ、髄膜炎など）命を守る。 ・心理ケア…子どもたちが心の傷から立ち直ることができるようにする。 ・母子保健…妊娠中や出産直後の母親や赤ちゃんの定期検診を行う。 ・水と衛生…清潔な飲み水を確保できるようにしたり、簡易トイレを設置したりするなど衛生に気を配る。
2	3　なぜ、「国境なき医師団」が活動する国では、子どもたちが命の危険にさらされているのでしょうか。 ※「世界一番受けたい授業」のプリントを配布する。	・戦争や紛争によって食糧や安心して眠れる家がなくなったり、医師や薬が不足し健康な暮らしができなくなったりするから。 ・子どもが兵士となって、戦いに参加し命を失うこともある。 ・飲み水など環境が悪いために、下痢やコレラなどの病気で命を失う子どもが大勢いる。はしかで命を失う子ども多く存在する。 ・自然災害によって住んでいた場所が失われ、暮らしが成り立たなくなる。 ・感染症が流行しているところ。
	4　なぜ、「国境なき師団」のような組織が必要なのでしょうか。	・誰でも人種、宗教、政治的な関わりを超えて差別することなく援助するため。 ・各国からいろんな人が集まって活動しているので、ひとつの国が運営するのは難しいから。

3 + 課外	5　「国境なき医師団」の他にも子どもたちのために地球規模で活動している、団体・組織をさがそう。 ※資料集や教科書を基に調査を進める。 ※国連の組織を確認する。	・ユニセフ…募金活動を通して、世界の子どもたちの命を守るために、薬を与えたり、予防接種を行ったりしている。 ・ユネスコ…募金活動を通して、世界の子どもたちが学校で学んでいくことができるように活動している。 ・WFP…国連の機関の一つ。慢性的な貧困、紛争などの人為的災害、地震や津波、洪水、干ばつなどの自然災害、ジェンダーの格差、そしてこれらが複合したものなどが原因としての飢餓状態の解消を援助している。
	6　なぜ、地球規模で問題解決に取り組まなければならないのでしょう。	・その国が戦争状態で、国として問題を解決することが不可能だから。 ・国と国が複雑に関係し、一つの国だけで解決できないことが、多くなってきているから。 ・日本など恵まれた国が、苦しんでいる国の人々を助けることは当然だから。 ・病気の問題など、解決しないと他の国にも悪い影響を与えることが起きているから。
4 5 6 4 5 6	7　今、地球規模で問題の解決に取り組まなければならないことは何か。 ※問題の把握と、その解決策についてジグソー学習を行う ジグソーグループ 課題の把握 追究班の決定 追究グループ 調査活動 情報交換 報告準備 ジグソーグループ 調査結果の報告 報告内容の質疑	**＜地球環境の問題＞** オゾン層の破壊によって、人体に有害な紫外線が降り注ぎ皮膚ガンが増える。熱帯林が木材の輸出のために伐採されたり、農業をするために焼かれたりしてどんどん失われている。CO_2の吸収力の低下にもつながっている。放牧や森林の伐採が原因で、砂漠化が進んでいる。砂漠化の影響を受けているのは貧しい国が多い。 **＜地球温暖化の問題＞** 地球の平均気温が上昇にともない、海面が上昇し水没する可能性のある地域や、国があること。その原因としてはCO_2の排出量の増加や、森林伐採などによるCO_2の吸収力の低下などが挙げられている。 **＜飢え貧困の問題＞** 世界には全ての人々が食べるのに十分な食糧がある。それにもかかわらず、およそ8億5000万人が栄養不良や飢えに苦しんでいる。そのうち3億5千万人以上が子どもたちです。飢えを原因として毎日、5歳未満の子ども1万8000人を含む、2万5000人が命を落としている。 **＜戦争・紛争の問題＞** 日本も経験したが、戦争になると多くの罪のない人の命が奪われる。現時点でも世界中で紛争や戦争の状態にある地域が、30か所以上もある。そこでは、子どもたちが兵士として戦いに参加させられ、命を失っている場合もある。 **これらの問題の原因は、ほとんど人間が作っている。これらの問題にはつながりがある。**
7	8　なぜ4つの問題にはつながりがあるのでしょう。 外国から多くの物を輸入する私たち日本人の豊かな食生活、石油などのエネルギーの消費がこうした問題と関係がありそうだぞ！	＜環境問題⇔地球温暖化＞ ・砂漠化によって緑が失われ、温暖化につながる。 ・地球の温暖化が砂漠化に影響を与えている。 ＜貧困問題⇔戦争・紛争＞ ・貧困が戦争の原因になる。（子ども兵の問題） ・戦争によって、住む場所を奪われ、難民となり、貧しい生活をすることになる。 ＜戦争・紛争⇔環境問題＞ ・戦争や紛争が大きな環境破壊につながっている。広島・長崎の原爆がよい例だ。 ＜環境問題⇔貧困問題＞ ・砂漠化によって農業ができなくなり、貧困につながる。 ・貧しいから、肥料などを買うことができなので、焼畑農業を続けるしかない。 ＜地球温暖化⇔貧困問題＞ ・温暖化による災害で土地を失ったり、作物を栽培できなくなったりして貧困になる。
8	9　地球規模の問題を解決するために、自分は何ができるだろう。	＜地球環境の問題に対して＞ ・一人一人が自分の生活を見直す必要がある。エネルギーの無駄遣いをしないように気をつけることが大切だ。 ＜飢え貧困の問題に対して＞ ・自分にも関係のあると考え、募金NGOなどの活動に協力したい。 ＜戦争、紛争の問題に対して＞ ・戦争や紛争が貧困や環境の悪化にも関係している。平和の大切さを訴えることが大切だ。 **一つしかない地球のことを考えて、小さなことでもよいから、自分ができそうなことに、取り組んでいくことが何より大切だ。**

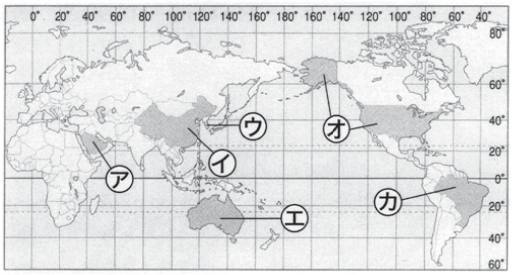
資料３　　二つの小単元で行ったプリテスト、ポストテスト

小単元Ⅰ「日本とつながりの深い国」で行ったプリテスト

プリテスト「日本とつながりの深い国」

6年　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

日本と関係の深い国々について、答えましょう。



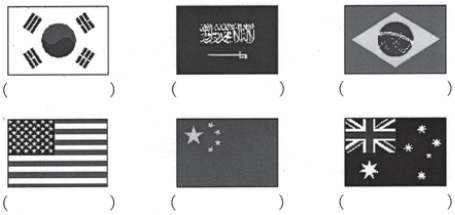
(1)　つぎの国は、地図の㋐～㋕のどこですか。

アメリカ合衆国		大韓民国（韓国）	
サウジアラビア		中華人民共和国(中国)	
ブラジル			

(2)　**アメリカ合衆国・韓国・サウジアラビア・中国・ブラジル**の５つの国について人物、歴史、生活など知っていることを自由に書いてください。

国の名前	知っていること
アメリカ合衆国	
大韓民国（韓国）	
サウジアラビア	
中華人民共和国（中　国）	
ブラジル連邦共和国	

(3)　つぎの国旗の表す国の名前を書きましょう。



(　　)　(　　)　(　　)

(　　)　(　　)　(　　)

(4)　自分の身の回りで外国とのつながりを意識することがありますか。

ある　　ない　　いずれかに○を付けてください。

選んだ理由を書いてください。

(5)　**アメリカ合衆国・韓国・サウジアラビア・中国・ブラジル**の５つの国について、あなたが感じる親しみの度合を選んで○をつけてください。

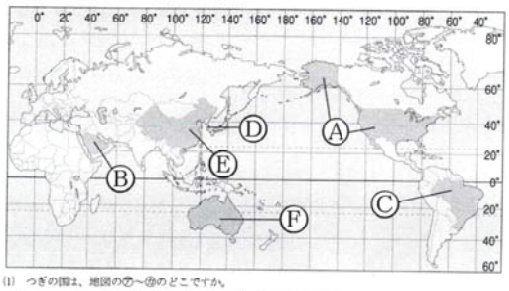
国の名前	親しみを感じる度合			
アメリカ合衆国	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない
大韓民国（韓国）	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない
サウジアラビア	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない
中華人民共和国（中国）	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない
ブラジル連邦共和国	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない

小単元Ⅰ「日本とつながりの深い国」で行ったポストテスト

ポストテスト「日本とつながりの深い国」

6年　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

日本と関係の深い国々について、答えましょう。



(1)　つぎの国は、地図の㋐～㋕のどこですか。

アメリカ合衆国		大韓民国（韓国）	
サウジアラビア		中華人民共和国(中国)	
ブラジル連邦共和国			

(2)　**アメリカ合衆国・韓国・サウジアラビア・中国・ブラジル**の５つの国について人物、歴史、生活など知っていることを自由に書いてください。

国の名前	知っていること
アメリカ合衆国	
大韓民国（韓国）	
サウジアラビア	
中華人民共和国（中　国）	
ブラジル連邦共和国	

(3)　つぎの国旗の表す国の名前を書きましょう。

(　　)　(　　)　(　　)

(　　)　(　　)

(4)　自分の身の回りの物やできごとなどから、外国とのつながりを感じることがありますか。

ある　　ない　　いずれかに○を付けてください。

「ある」を選んだ人は、どんな物やできごとからそう考えたのか書いてください。（箇条書きでよい）

(5)　**アメリカ合衆国・韓国　サウジアラビア・中国・ブラジル**の５つの国について、あなたが感じる親しみの度合を選んで○をつけてください。

国の名前	親しみを感じる度合				その理由
アメリカ合衆国	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない	
大韓民国（韓国）	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない	
サウジアラビア	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない	
中華人民共和国（中国）	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない	
ブラジル連邦共和国	とても親しみを感じる	わりと親しみを感じる	あまり親しみを感じない	まったく親しみを感じない	

小単元Ⅱ「世界の平和と日本の役割」で行ったプリテスト

プリテスト「世界の平和と日本の役割」　6年　＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

❶ 国連について、答えましょう。

(1) 国連の正しい名前を選び○で囲んでください。

A　国際連盟　　B　国際連合　　C　国際安全連合会

(2) 国連について、（　）にあう言葉を□から選んで書きましょう。

・国連は、第二次世界大戦後に、世界の（　　）と（　　）を守る目的でつくられ、経済や社会、文化などの（　　）を、各国が（　　）して解決していくための組織である。

平和	問題	国旗
安全	企業	文化
無視	協力	日本

(3) 国連のつぎの機関の働きを、あ～えから選びましょう。

▸ユニセフ……□
（国連児童基金）

▸ユネスコ……□
（国連教育科学文化機関）

▸総会……□

▸WHO……□
（世界保健機関）

あ
教育、科学、文化を通じて、平和な社会をつくることを目的としている。

い
国連の中心機関で、毎年、すべての加盟国の代表が出席して話し合う。

う
保健・衛生の向上を通じて、人々の平和で安全な生活の実現をめざす。

え
戦争や食料不足による飢えなどで、きびしいくらしをしている子どもたちを助けることを目的としている。

(4) 国連以外にも世界の困っている地域の人々のために活動している組織や団体（NGO《非政府組織》、NPO《非営利団体》）があります。あなたが知っている組織や団体の名前や活動内容を書きましょう。

団体・組織名	活動内容

❷ 世界の様々な問題について考えましょう。

(1) 問題が起きている国や地域に色を塗りましょう。

(2) 今、世界中で様々な問題が起きています。みんなで力を合わせて解決していかなければならない問題にはどのようなものがありますか。また、どうやって解決すればよいと考えますか。

問題	解決方法

(3) 日本は国際社会の中でどんな役割を果たしていかなければならないと思いますか。

小単元Ⅱ「世界の平和と日本の役割」で行ったポストテスト

ポストテスト「世界の平和と日本の役割」　6年　＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

❶ 国連について、答えましょう。

(1) 国連の正しい名前を選び○で囲んでください。

A　国際連盟　　B　国際連合　　C　国際安全連合会

(2) 国連について、（　）にあう言葉を□から選んで書きましょう。

・国連は、第二次世界大戦後に、世界の（　　）と（　　）を守る目的でつくられ、経済や社会、文化などの（　　）を、各国が（　　）して解決していくための組織である。

平和	問題	国旗
安全	企業	文化
無視	協力	日本

(3) 国連のつぎの機関の働きを、あ～えから選びましょう。

▸ユニセフ……□
（国連児童基金）

▸ユネスコ……□
（国連教育科学文化機関）

▸総会……□

▸WHO……□
（世界保健機関）

あ
教育、科学、文化を通じて、平和な社会をつくることを目的としている。

い
国連の中心機関で、毎年、すべての加盟国の代表が出席して話し合う。

う
保健・衛生の向上を通じて、人々の平和で安全な生活の実現をめざす。

え
戦争や食料不足による飢えなどで、きびしいくらしをしている子どもたちを助けることを目的としている。

(4) 国連以外にも世界の困っている地域の人々のために活動している組織や団体（NGO《非政府組織》、NPO《非営利団体》）があります。あなたが知っている組織や団体の名前や活動内容を書きましょう。

団体・組織名	活動内容

❷ 世界の様々な問題について考えましょう。

(1) 今、世界中で様々な問題が起きています。みんなで力を合わせて解決していかなければならない問題にはどのようなものがありますか。また、どうやって解決すればよいと考えますか。

問題	解決方法

(2) (1)で答えた問題が起きている国や地域に色を塗りましょう。
（例のように国や地域と、起きている問題が分かるように工夫して書いてください）

(3) 日本は国際社会の中でどんな役割を果たしていかなければならないと思いますか。

国のレベルで

個人のレベルで